

歴史資料を集めて読み解くこと(3)

猪垣いのがきとやんばる地域

恩納村史「歴史編」専門委員 川島 淳

先日、仲泊で野生のイノシシの子どもが人前を、駆け回っている姿を見ました【写真1】。現在、イノシシは山の中で生活し、普段見かけることはあまりありません。ここでは、イノシシと人間との関係を軸に史資料を見てみましょう。

ところで、現在「恩納村史 歴史編」は、仲原弘哲専門部会長の下で、鋭意編集中です。恩納村の歴史を明らかにするには、琉球・沖縄史や、やんばる地域の歴史のなかに位置づける方法、あるいはまた、恩納村で起こった出来事や事象を積み重ねる方法などがあります。今回、猪垣というモノ資料と、それにまつわる文書資料を組み合わせながら、やんばる地域における他市町村の歴史との異同性を探ることで、改めて恩納村の特質について考えます。



【写真1】仲泊遺跡を走り回るうり坊
(2024年10月2日撮影)

猪垣は、イノシシが農作物を荒らしたり人に怪我を負わせたりするので、その被害を防ぐために設けられたものです。恩納村では2005年に谷茶で文化財予備調査が行われました。報告書によると、谷茶で猪垣と落とし穴が発見され、その猪垣は、全長820mに及び、所々にテールサンゴも見られました。2006年度に谷茶で実施した調査の報告書では、猪垣とともに畑の痕跡も確認されました。猪垣は【写真2】の通りです。また、谷茶の猪垣付近では、イノシシの白骨が確認されました【写真3】ので、今でも猪

垣が機能していたとも考えられます。

谷茶で確認された猪垣はテールサンゴなどで作られたものです。大宜味村では石灰岩などを素材とした猪垣が確認されています。金武町伊芸では、石を積んだ猪垣が見られます【写真4】。このように、地域によって猪垣の素材が異なるのは、地域で産出されるモノによると考えられます。

発掘調査によって確認された猪垣が造られた経緯や方法などについて見てみましょう。琉球王国時代に恩納間切（現在の、恩納村）における各村（現在の、字）の決めごとを記した「恩納間切各村内法」（『沖縄県史14 雑纂1』）には、次の条文があります。

第二十七条 猪垣通ヨシ苗植付サセル事

（中略―引用者）

第八十五条 猪垣ノ義持地二分配ス若破壊シテ猪出入ス時ハ罰札下付シ後犯者出来サル間ハ科銭トシテ毎日金二百文ツ、申付候事



【写真2】大袋原の猪垣(恩納村教育委員会)



【写真3】谷茶にあったイノシシの骨の一部
(2023年1月29日撮影)

恩納間切の各村において守るべきことには、猪垣として、ユスギ・ユシギ（和名、イスノキ）の苗を隙間なく植え付けること、猪垣が破壊されてイノシシが出入りする際には罰札を渡し、後に破壊者が判明しない場合には、毎日金二百文ずつ納めることが定められていました。この条文の内容は、金武間切や名護間切、国頭間切、羽地間切、今帰仁間切、本部間切といった国頭方Ⅱ山原における各村内法でも確認できることから、各村におい